第6章　英語支配と英語教員養成

石　原　昌　英

1．は　じ　め　に

「黒船の衝撃」の後、西洋列強の強大な軍事力の前に日本は19世紀半ばに鎖国制度を廃止し西洋に開国した。明治時代には「進んだ（優れた）」欧米諸国に追いつくために近代化（西洋化）が急務とされ、近代化を達成するために英語の習得が重要視された。この時以来、20世紀の一時期を除いて、英語は日本人を魅了し続け、同時に日本人は英語および英米人（西洋人）にコンプレックス・劣等意識を持たされ続けてきた（中島義道（1993）や太田雄三（1995）を参照）。第二世界大戦後、英米の政治力・軍事力・経済力を背景に、英語の世界的な普及はさらに広まり、「英語は世界の共通語である」と言われるまでになった。アジア諸国の中で初めて「先進国」の一員となった日本も例外ではなく、英米（西洋）文化が日本（アジア）文化より優秀で先進的であるという誤った認識のもとに、英米の言語である英語が日常生活や職場で頻繁に使われてきた。その結果、英米（西洋）文化が優秀で先進的であるという幻想的な漠然としたイメージの形成がさらに加速された。このような西洋（英米）文化の崇拝と英語の氾濫に対して、大石俊一（1990）、津田幸男（1990、1993、1996）等が「英語支配」及び「英語帝国主義」現象の問題を指摘し、その問題をいかに克服するかを議論している。本稿では、学校での英語教育にこの問題の克服の糸口があると見て、英語教員の資質とは何かを議論し、そして大学における英語教員の養成はどうあるべきかについて私案を述べる。

2．「英語支配」の現状

本題の議論に入る前に、本節では英語の氾濫について筆者が日頃感じていることを述べて、この問題を検討する。日本において様々なところで「英語支配」が引き起こしている問題または「英語支配」を引き起こす問題については上にあげた文献に詳細に述べられているが、「英語支配」の例をさらに論じてみたい。

2.1　包装等に見られる英語

買い物という日常的行為の中で、「英語支配」を再認識させられることがある。例えば、デパートやスーパーなどで買い物をすると品物を入れるために紙袋等が買い物袋として使われる

ことは周知のことである。一部のデパートやスーパーの買い物袋には英語の文章や語句が印刷されている。買い物客の大半がそのことをあまり意識しないであろうが、買い物客のほとんどが英語よりも母語である日本語のほうを理解する日本人であるという状況で、英語の文章や語句を印刷することの目的・理由は何であろうか。デパートやスーパー以外にもそのような現象が見られる。一例をあげると、筆者が勤務する大学の書店で購入した書籍等を入れてもらう紙袋に次の英語の文章が印刷されている。(大学生協に加盟する他の大学の書店でも同様であろう。)

THE ROLE OF UNIVERSITY
CO-OPERATIVES IN THE TIMES
OF CHANGE

Support Study, Education, and Research
Activities at a University and Contribute
to the Overall Improvement of the
University Community
Nurture the Spirit of Co-operation, and
Strive to Improve the Life and Culture
through the Co-operative Power
Link the Life with Society, and Expand
the Circle of Co-operation

ちなみにこの大学に在学する外国人学生(留学生)の数は206名(1997年前期の在籍者数)で全学生数8,563名の2.4%にすぎない。その中で英語を母語とする留学生はごく少数である。言い換えると、この紙袋を手にするのはほとんどが日本人である。日本人しか手にしないと言っても過言ではない紙袋に英語の文章を印刷する理由は何なのであろうか。

もう一つの例を見てみよう。沖縄県の某洋菓子店で買ったパンなどを入れる買い物袋には次の英文が印刷されている。

The delicious aroma of fresh bread is a pleasure many families
are rediscovering. All bread taste best fresh from the oven.
Some of them are served as breads for breakfast, brunch or
luncheon and between meal snacking.

この店でパンやケーキなどを買う人は日本人がほとんどであろう。ここでも外国語である英語よりは母語である日本語の方をより理解する日本人を相手にしているのに、品物を入れる袋に日本語ではなく英語の文章を印刷することのメリットは何なのであろうか。

買い物袋等に英語の文章・語句を印刷することに何の意味があるのだろうか。これらの英文は英語を話す外国人を意識して印刷されたものではなさそうである。なぜなら、これらの袋を直接手にする外国人はほとんどいないであろうことは明白であるし、また、両方とも英語の分かる外国人が読んでも意味解釈はほぼ不可能であろうことも明らかであるからである。このような外国人（特に英米人）は英語（らしきもの）で書かれたこの文の「おかしさ」を指摘することはあっても、この文の意図するものを考えようともしないであろう。では、日本人がこの英文を読んでその意図しているものを理解できるであろうか。これもかなり難しいであろう。わからない単語を辞典を引いて調べるというような日本人もいないであろう。もしいたとしてもその数はきわめて少ないであろう。日本人にも英語を話す人たちにも読まれないとしたら、買い物袋に英語の文章や語句を印刷することの目的・理由は何であろうか。

2.2　ラジオ番組などでの英語

次にラジオなどでの英語について述べてみたい。沖縄で放送されているラジオ番組の一部には英語が頻繁に使われているものがある。ある放送局の平日（月～金）の午後2時からの番組と日曜日の午後6時からの番組は、一部だけを聴くと英語が日常的に話されている国で録音されたものが放送されているのかと勘違いすることもあり得る。また、この二つの番組を聴いていて奇異に感ずる時がある。それは、日本語で書かれた聴視者からのファックスや葉書が読まれ、それに対する感想等が英語で述べられる時である。どれだけの聴視者がこの英語を理解しているのであろうか。これらの番組の聴視者は日本人だけで、沖縄在住の外国人でこのような番組を聴いている人はほとんどいないであろう。日本人でもラジオから流れてくる英語を理解できるものは少ないであろう。とすれば、聴いている人たちが放送されている内容を知らなくてもいいということであろうか。だとしたら、この番組を放送する目的は何であろうか。

この問題については大きな関心があるので、昨年（1996年）9月の研究会でこのことを話題にした。それに対して、津田幸男氏が次のようなことを述べていた。名古屋でも似たようなFM番組が多いので、新聞にこのような番組の問題を指摘する投書をしたところ、ある高校生から、日本人向けの番組で英語がかなりの割合で使われることが問題であるとは思わないし、また、英語のリスニングの訓練になるからこの種の番組はためになるという主旨の反論があった。また、その研究会にオブザーバーとして参加していたある新聞記者からは、このような番組はほとんどが英米のヒット曲を放送するものなので雰囲気をだすために英語が使われているのではないかという指摘があった。また、別の新聞記者からはそのような番組は10代20代の若者が聴いていて、彼らは内容のことはほとんど気にしないでBGMとして聴いているのではないかという指摘もあった。

はたしてそうであろうか。日本において英語学習を目的としていない番組以外に、日本人聴視者に向けて英語で放送することに意味はあるのだろうか。英米の雰囲気をだすために英語が使われているのではないかということであるが、上に述べたように日本語でのファックスや葉書が読まれ、それに対して英語でコメントすることにはこの指摘が当てはまらないのは明白である。また、沖縄で非常に人気のあるラジオ番組では、DJの二人が日本語でやり取りをして

いて、聴視者からの日本語でのファックスや葉書が読まれ、次に“Here is something new from Amuro Namie”という英語が話され、日本語の歌がラジオから流れてくることもある。また、東京から送られてくる主に日本のヒット曲を流す番組には、番組やスポンサーの紹介を英語でやるというのもある。言い換えると、英米の雰囲気をだすために英語が使われるという指摘はここでも当てはまらない。さらに、その大部分において英語が使われている番組をBGMとして聴いているとしたら、音楽を除いた部分は中国語や韓国語、またはスペイン語やポルトガル語でもいいはずである。しかし、ほとんどの場合このような番組で使われる言語は英語なのである。例えばブラジルのサンバを紹介するのにもポルトガル語ではなくて英語が使われることもあるだろう。言い換えると、英語を使うことに何か意味があるということである。では、その意味は何であろうか。

ここ10年来の若者向けの音楽（ポップス）にも英語が氾濫している。4～5年前学生に人気のあるラジオ番組を聞いていた時の出来事である。「ではミスター・チルドレンのトゥマロウ・ネヴァー・ノウズをお聞きください」という日本語が聞こえ、その後すぐに流れたきたのは英語ではなくて、日本語の歌であった。「ミスター・チルドレン」が歌手の名前で、「トゥマロウ・ネヴァー・ノウズ」が歌の題名である。おもしろいことに「トゥマロウ・ネヴァー・ノウズ」というカタカナの（英語の単語を並べた）題名を持つ歌の中で英語の歌詞のほんの一部でしかなかった。後でいろいろと調べてみるとこのような歌・歌手がかなり多いのには驚かされ、考えさせられた。日本人の歌手が日本人向けに日本語の歌詞で歌うのに、歌手名も歌の題名も英語であるとはどういうことであろうか。結局は、日本人と英語という問題がここにも見られるのである。このようなポップスを日常的に聞いている若い世代はこの状態を何とも思わないのであろうか。もし、そうであば、このギャップは「世代の違い」だけでは片づけられない問題のような気がする。

2.3　日本人が英語で話すとは

「日本人と英語」の問題の極端な例が、1996年6月15日の琉球新報夕刊の記事にあった。当山忠氏の書いた「私のTV批評」というコラムである。少々長くなるが下に引用する。なお、引用においては実名は伏せる。

> 「本当に怒っている時の言葉は、ウチナーグチ［沖縄ことば（石原）］じゃないと言い表せない」というのは、ウチナーンチュ［沖縄人（石原）］の言葉だが、これは埼玉県だろうが青森県だろうが同じことだ。（中略）さすがにxも、あるリポーターの質問には頭にきたようで、すごい剣幕で怒鳴り始めたのである。
>
> それはそれでいいのだが、その怒りの言葉が“英語”だったのである。約十五秒くらい、その記者会見場はxの“怒りの英語”でまん延することになった。なにもリポーターはアメリカ人でもないし、そこは外国でもなかったのだが…。
>
> （中略）
>
> ああ～、ワタシたちは英語にまだ劣等感をもっているんだなあという、不思議な焦燥感がワタシの胸に迫ってきたのだ。

ここで注意したいのは、xが英語を使うことによって、記者団に「おまえらみたいな低能には、アタシが言っている難しい英語はわからないだろう」という含みとともに、英語で怒ることによる日本人への差別意識の無意識な表れである。それは裏返せばx自身の英語劣等感の露呈なのだ。

（中略）

xの無意識にではあったろうが、英語による日本人蔑視感が怒りによって噴き出してきたのは、明治以降の日本の英語教育によるオデキみたいなものだろう。

ここで当山氏が「明治以降の日本の英語教育によるオデキみたいなもの」と述べているものこそまさに本稿のテーマであろう。つまり、日本において日本人が日本人に向かってなぜ英語を使わないといけないのかという根本的な問題である。

上の例が示すように、英語は日本語よりすぐれていると考え、英語ができることを何か特別なものであるかのように考えている人たちもいるようである。筆者自身も、学生時代にアメリカ人と英語で話をしていて、またFENのニュースを聞いて友人に説明をしながら変な優越感をもってしまったことを覚えている。ところが、学生時代に留学したアメリカで知り合った日本人の友人が私を含めて日本人に対しても英語で話すことを要求し、日本語で話すことを拒否したことに直面し、何かおかしいのではと感ずるようになった。津田幸男（1993）も似たようなことを英語支配の一例としてあげている。留学先で日本語を捨てることに努めた女性の話であるが、下に引用する。

今回の私の留学の目的は、英会話の向上はもちろん、ホームステイの家族を通してさまざまなアメリカンウェーを学ぶことだった…。いきた英語を学ぶために…頭の中のすべての日本語を捨て、英語に置き換えたほうがいいということだ。つまり、ひとりごとをいうときも、日記を書くときも、犬に話しかけるときでさえも、すべて英語で！（津田幸男 1993：25）

英語を学ぶために自らの母語である日本語を捨てないといけないのであろうか。日本語を捨てると言うことは、日本人であるといる自己のアイデンティティを捨てることにはならないのか。英語のいうのはこうまでして学ばなければならい言語なのだろうか。

このように、日本人の英米文化及び英語に対する心情・態度には何か特別なものがあり、日本における英語の氾濫はこの特別なものに起因しているのであろう。また、英語を母語とする人達（主に英米人）の一部にも他の言語よりも優れているとして英語を特別視する傾向がある。この二つの要因がからみあって「英語支配」が助長されてきたのであろう。しかし、このような状況では津田幸男（1993）が指摘するような問題が起こる。

英語を母国語とする人間、または英語に堪能な人間と、英語を母国語としないか、または英語が堪能でない人間が出会って英語で話をするとき、何が起きるかは明白である。具体的にいうと、アメリカ人と日本人が英語で話し合うとき、日本人は表現を制限されるばかりか、相手のいうことも聞き取れず、不利な立場に追い込まれる。日本人の基本的な権利や立場が失われることさえある。「英語支配」は、こういった不条理な現実の蓄積と繰り返しにより正当化され、動かしがたいものになってきている。（津田幸男

1993：15）

日本人が日本において英米人と英語で話をするとき「英語ができなくてすみません」と謝ることがよくある。英語という言語のせいで、相手の言っていることが理解できなくて、自分の言いたいことも言えない状態にさせられている日本人、つまり基本的な言語権が侵害されている日本人がその権利を侵害している英米人に「英語ができなくてすみません」と謝る必要があるのであろうか。

最後に、担当する専門科目の授業で考えさせれることがあったので、それについて述べたい。学期最初の授業で１年次の学生になぜ英語を専攻したのかを尋ねたところ、一人の女子学生がだいたい次のようなことを言った。「高校時代に知り合いのアメリカ人から英語ができないと馬鹿にされて非常に悔しい思いをしたので、英語をもっと勉強しようと思って大学で英語を専攻とすることにした。」（ちなみにこのアメリカ人の母親は日本人である。）日本で英語ができないことは、（日本語のできない）アメリカ人から馬鹿にされることなのだろうか。また、そう言われて悔しい思いをしなければならないことなのだろうか。「英語ができないから外人（英米人）と話がしたくてもできない。高校時代・大学時代にもっと真剣に英語をやっておけばよかった」というようなことをよく耳にする。これは英語圏の国ではなく、日本で日本人が外人と英語で会話をするということである。こういうことを言わせるものは何なのだろうか。「日本に何年も住んでいるのに外人が日本語をできないから、話もできない。日本語を勉強してくれたらいいのに」というような不満・要求を口にする日本人は筆者の知る範囲にはほとんどいない。こういうことを言わないのはなぜであろうか。

3．英語は特別か

私は勤務校で「英語学概論Ｉ」を担当しているが、英語と社会の関わりを講義するときには必ず、アメリカで議論されている「英語第一主義（English Only）」や「公用語としての英語（Official English）」として知られる問題と、日本で議論されている「英語支配・英語帝国主義」の問題についても触れるようにしている。理由は二つある。一つは、学生の多くが英語の教員免許を取得することをめざしているので、社会的にみて英語とはどういうものか、また第二言語として英語を教えるとはどういう側面があるのかを考えてほしいからである。もう一つは、英語専攻の学生に、英語は言語学的にみて他の言語と同格で、何も特別に優れた言語ではないことを理解してほしいからである。

ところが、英語は日本語と違って主語や目的語がはっきりしているからいいとか、結論が先に来るからいいとか、英語は日本語より論理的であるから優れているとかいうようなことが言われることがある。はたしてそうであろうか。日本語では、談話や場面・発話の流れから主語や目的語がはっきりしている場合には、主語や目的語は文中に明示されない。英語のように文中に明示されてないからといって、主語や目的語があいまいであるということでない。また、英語が結論が先に来るからいいということであるが、結論は必ずしも先に来なければならないものではないはずである。さらに、日本語が英語に比べて非論理的であるという指摘も誤りで

ある。「論理的」である英文を論理的な和文に訳すことができるのであるから、日本語が英語に比べて非論理的であるということにはならない。

V. Fromkin and R. Rodman (1993) は、言葉の平等性について、「ある言語・地域語が他の言語・地域語よりも優れているとか劣っているとかいうことはあり得ない。もし、ある言語・地域語が優れているとか劣っているとかいう判断がなされたとしたら、それは科学的・言語学的基準によるものではなく、社会的要因に影響された判断である」と述べている。言い換えると、英語が他の言語、例えば日本語より優れているわけでもないし、日本語が英語に比べて優れているわけでもないのである。単に違っているだけである。ところが、英語が「世界共通語」的に使われているのは英語が他の言語より優れているからだと主張する人たちがいる。つまり、英語という言語が現在の地位を得たのは、その言語的特性によるという説であるが、これは明らかに誤りである。英語が「世界共通語」として使われているのは米英の政治的・経済的・軍事的影響力の大きさと英国の植民地政策や英米の言語戦略によるものであって、英語が他の言語より優れていたからではない。

4．英語支配と英語教員の養成

「英語支配」の問題と関連して、次のことはたびたび指摘されている（加藤淳平（1996)、栖原暁（1996)、小坂井敏晶（1996）等を参照)。一部の日本人にとり、英米文化とは（金髪の）白人のものであり黒人を含む非白人は英米人とはみなされない。また、西洋文化崇拝とその反動としての非英語圏（特にアジア）の人々や文化の軽視・蔑視が日本の文化交流を妨げている。例えば、栖原がアジアからの留学生に行ったアンケート調査には次のような日本人に対する不満・疑問が記されている。

- （前略）日本についての感じは、私も東洋人ですけど、日本人はまるで東洋人から脱皮しようとしている感じで、生活と考え方について西洋人のまねをしているみたい。同じ東洋人を無視していることは気分がよくないし理解できないんですね。（韓国、女・30歳）
- 何回も経験したが、日本人の「金髪崇拝」とアジア系の人々への軽蔑を心痛く感じます。（中略）日本の次の世代への教育のなかでもっと世界中の人々を平等に見てつきあうように教えてほしいものです。（台湾、男・31歳）
- 日本の国だけが国際化するんじゃなくて、日本人も国際化してほしい。また東南アジアの人でも人間ですから、差別しないてほしい。（インドネシア、男・23歳）

このような非英語圏の人々や文化に対する蔑視・差別をなくすためにはどうすればいいのであろうか。これは英米（西洋）文化そして英語が他の文化・言語よりも優れているという誤った認識に起因しているので、このような行き過ぎた英米文化崇拝そして英語崇拝をなくすことにつとめなければならない。

4.1　英語教員の資質と能力

英語教員の資質と能力は二元的である。一つは「英語力」である。英語を児童・生徒に教えるからには、外国語として英語を教えることができる資質・能力がなければならない。しかし、単に教えるだけの英語力があるというだけでは英語教員に要求されるもう一つの資質が欠けている。英語教員には、英語・英米文化を崇拝するあまりその他の言語・文化を蔑視するようなことがなく、あらゆる言語・文化に対して公平な態度で接することができるという資質が要求されている。今までの英語教育は英米に目を向けがちであったため、この資質はあまり重視されなかった。

昨今の学校教育における問題の解決を計るために文部省が中心となって大学における教員養成の改善に関する研究が行われているが、その中で、教員に求められる資質と能力について議論されているようである。日本人と英語の関わりにおいて問われている「英米崇拝」・「英語支配」や「アジア蔑視」の問題の解決には英語教員の資質・能力が重要な鍵となるであろう。また、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」審議した第15期中央教育審議会（中教審）は1996年7月に第1次答申を行ったが、答申の第3部第2章「国際化と教育」の中で次のような点に留意して国際化の状況に対応した教育が進められるべきであると指摘されている。

(a)　広い視野を持ち、異文化を理解するとともにこれを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。

(b)　国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。

(c)　国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

これらの留意点に関連して、中教審はさらに次のように述べている。

国際理解教育を進めていくに当たって、特に重要と考えられることは、多様な異文化の生活・習慣・価値観などについて、「どちらが正しく、どちらが誤っている」ということではなく、「違い」を「違い」として認識していく態度や相互に共通している点を見つけていく態度、相互の歴史的伝統・多元的な価値観を尊重し合う態度などを育成していくことである。

一つのものの見方や考え方にとらわれて、異なる文化・生活・習慣などを断定的に評価するようなことは、子供たちをいたずらに偏見や誤った理解に陥らせる基になりかねず、決してあってはならないことである。

また、国際理解教育を進めていくに当たっては、自分自身が何者であるのかを知ること、すなわち自分自身の座標軸を明確に持つことが重要である。このことなくしては、相手からも理解されず、また、相手を理解することもできないと言わなければならない。

国際化の状況に対応した教育を促進するうえで英語（外国語）教育に期待・要求されるものを考えると、この答申に謳われていることは児童・生徒に教える側に立つ英語教員にも必要とされている資質である。とくに、過度の英米文化崇拝・英語崇拝に影響されて「英米文化が優れ

て（進んで）いて、日本・アジア文化が劣って（遅れて）いる」というふうに断定的に評価するような教師であってはならない。教師自身にはそのような偏見が無くても、英語を教える際に、英米人・英米文化にたいするあこがれが無意識のうちに表出し、「それに対して日本では…」と言ってしまう可能性がある。教師のそのようなことば・態度は子供たちに偏見をもたせてしまう可能性があるので、英語教師は「言語・文化には差違はあるが優劣はないこと」を理解し、子供達もそのことを理解できるようにすべきである。また、英語教師が英米人に対する劣等意識や英語コンプレックスを過度に持つことは望ましくないので、「自分自身が何者であるのかを知ること、すなわち自分自身の座標軸を明確に持つこと」によって、これを克服・解消できるのでないかと思われる。

中教審は、「外国語担当教員の採用に当たっては、外国語によるコミュニケーション能力に関する評価を一層重視するとともに、採用後は、海外研修を充実し、できるだけ多くの外国語担当教員が海外での研修の機会を持てるようにすることが望まれる。」と述べている。しかし、外国語（英語）によるコミュニケーション能力に関する評価を追求するあまり、異文化に対する公平な態度を持たず、日本文化・アジア文化を蔑視し、英米の言語・文化を崇拝するような者が英語の教員となるというようなことがあってはならない。そのような教員が英語を教えることの弊害は目に見えていて、求められる国際理解教育に逆行するようなことになりかねない。また、外国語担当教員が海外研修をすることにより研修先の人々や言語・文化を過度に評価し、日本やその他の国・地域の人々や言語・文化を蔑視することにならないように留意しなければならない。最初から日本文化・アジア文化と英米文化・西洋文化に対して公平な態度・理解をもつような者を採用すればこのような問題は起こらないであろう。そういう意味で、外国語担当教員の採用には上にあげた二つの資質が正当に評価されなければならない。

4.2　英語教員養成カリキュラム

斎藤兆史（1995）も述べているように、日本の英語教員の多くが英文科（または英語科、英米科等の学科）の卒業生である。大学・短大で英語・英文学を専攻する学生の多くが、中学生・高校生のころから英語が好きで、通訳・翻訳・旅行業等のように英語を使う仕事に就きたい、または英語を教えたいと思っている。筆者の勤務校でも昼間主・夜間主の英語・英文専攻学生のほとんどがそのように考えている。また、専攻学生の約8割が教員免許を取りたいと考えている。英語・英文専攻学生の一部には、英語・英米人・英米文化にたいする過度のあこがれを持つものもいて、このような学生が文化的・言語的偏見を持つようになってしまわないか懸念される。もし、このような偏見を持つに至った学生が中学や高校で英語を教えるようになると、その影響は憂慮されるものがあるであろう。子供達も英語・英米文化という特定の言語・文化にたいする過度のあこがれを形成し、他の言語・文化を軽視・蔑視してしまうようになってしまう可能性があるからである。このような悪循環は断ち切られなければならない。

中学や高校の英語教員を養成するという任務は主に大学・短大の英語科・英文科などの英語関連の学科が担っている。そこでの英語教員養成カリキュラムは「英語支配」の現状を克服するために大きな役割を果たすことができる。子供達に教えるに充分な英語力に加えて「異文化

に対する公平な態度」という資質を持つ英語教員を養成するためのカリキュラムはどうあるべきであろうか。

中学校・高校教諭の一種免許を取得するためには、現行の教育職員免許法では、「教育原理」、「教育心理学」、「教育方法」等の教職に関する科目は「実習」も含めて19単位、そして教科（英語）に関する科目は40単位取得することが義務づけられている。教科に関する科目はさらに最低修得単位数に関する条件があって、英語学区分の科目から6単位、英米文学区分の科目から6単位、英語コミュニケーション区分の科目から6単位、そして（外国事情を含む）比較文化区分の科目から2単位の計20単位を修得しなければならない。残りの20単位は四つの区分のいずれの科目でもよい。教科に関する科目は文部省の認定を受ける必要があるが、学科で提供するどの科目を教科に関する科目とするかは当該学科の裁量にまかされている。また、手続きは煩雑であるが、時代の変化や要請に応じて変更することも可能なようである。ちなみに、筆者の所属していた学科が文部省の認定を受けた教科（英語）に関する科目は次のようになっている。（この学科は平成9年4月の学部改組により解体された。）

英語学区分：（最低6単位）

「英語学概論 I」、「英語学概論 II」、「英語の発音」、「英文法」、「英語史」、「英語音韻論」、「英語形態論」、「英語統語論」

英米文学区分：（最低6単位）

「イギリス文学史 I」、「イギリス文学史 II」、「イギリスの演劇」、「シェイクスピア I」、「ロマン派の詩」、「18世紀～19世紀イギリスの小説」、「ビクトリア朝文学」、「20世紀イギリス文学」、「イギリスの文学と社会」、「アメリカ文学史 I」、「アメリカ文学史 II」、「アメリカの小説」、「アメリカの演劇」、「アメリカの詩」、「アメリカのエッセイ」

英語コミュニケーション区分：（最低6単位）

「英語講読 I」、「英語講読 II」、「オーラル・イングリッシュ I」、「オーラル・イングリッシュ II」、「英語スピーチ I」、「英語スピーチ II」、「英作文 I」、「英作文 II」、「高等英作文」

比較文化区分（外国事情を含む）：（最低2単位）

「言語と文化」、「日英両語比較研究」、「日英比較文化論」、「欧米文化論」、「英米の風物」、「英米の言語文化」

ところで、日本の大学において、英語教諭免許に関して文部省の認定を受けた学科で、教科に関する科目のなかに、「英語支配」や「英語帝国主義」について学ぶ科目を含めているカリキュラムを提供している学科はほとんどないであろう。筆者が知る限り、沖縄県内の大学・短大の英語・英文・英米文化専攻の学生が専門の授業科目としてこのような問題を学ぶことはない。言い換えると、英語の教諭免許を取得する学生は「英語支配」や「英語帝国主義」について学ぶことなく、またそのような問題があるということを知ることもなく英語の教員になるということはありえることになる。また、英語圏の文化や日本と英語圏の文化の比較に関する科目は提供されているが、英語圏以外の文化、特に日本文化や東南アジアの文化、についてもほとんど学ばない。このようなことを学ぶ科目が教科に関する科目に含まれていないからである。

「英語支配」や「英米人及び英米文化の崇拝」の問題を克服するために、「異文化に対する公平な態度」という資質を英語教員養成のカリキュラムを通して養成することは重要である。そのためには、教科に関する科目の下位区分を再編し、カリキュラムを改善する必要がある。筆者は、これからの英語教員には「比較文化」に関する知識がより必要とされると考えている。そこで、この区分の科目も最低6単位修得することを義務づけ、必要なら他の学科と協力して、非英語圏の人々や文化について学ぶ科目を履修することを義務づけることことを提案したい。同時に、「英語支配」やそれに関連する問題について学ぶ科目もこの区分に含めることを提案したい。また、「英米文学」の科目区分を「英米文化」と変更し、「アメリカ文化論」、「イギリス文化論」、「英米の言語文化」等の科目と英米文学関連科目の履修を義務づけ、「比較文化」の区分と対応させることを提案したい。このような改善を行うことにより、「広い視野を持ち、異文化を理解するとともにこれを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力」を持った英語教員を養成できるのではないか。これからの英語教育では「英語の言語能力」に加え、このような社会的な資質や能力を持った教員が必要とされるであろう。

もし、現時点でこのような改善を行うことが困難だとしたら、現行の科目区分の中に「英語支配」やそれに関連する問題について学ぶ科目を含めることを提案したい。英語の教諭免許を取得する学生は「英語支配」や「英語帝国主義」について学び、この問題の深刻な現状を理解して、この問題の解決に努力するような教員になってほしいからである。

5. おわりに

上に述べたように、英米人・英米文化・英語を崇拝するあまり、劣等意識やコンプレックスを持ってしまい、その反動で非英語圏の人々・文化・言語を軽視したり、蔑視したりする人たちが存在するのは事実である。このような問題があるにもかかわらず、英語教育関係者の間では「英語支配」や「英語帝国主義」の問題に対する関心は低く、日本の英語教育関係者は効果的に英語を教えることにのみ関心を向け、英語教育も原因の一部とされる「英語支配」や「英語帝国主義」の問題を含めて英語教育の社会的影響には目を向けてこなかった。ある大学教授によると英語教育関係者の間ではこの問題はタブー視されてもいるようである。したがって、この問題に取り組んでいる研究者は英語教育関係者からあまり相手にされないということも耳にした。しかしながら、英語を教える者、また英語を学ぶ者にとってこの問題は真剣に議論されるべきであろう。大津由紀雄（1995）と堀部秀雄（1995）も述べているように、「英語支配」や「英語帝国主義」に関する議論は英語教育のみならず、ひろく言語教育の本質を問い直し、さらに日本人と英語、人間と言語といった大問題を再考する絶好の機会である。このような議論を通して大学・短大における英語教員養成のカリキュラムが充実され、日本人と英語の関係が改善されることを期待する。

参考文献

Baron, D. (1990) *The English Only Question—An Official Language for Americans?.* New Haven : Yale University Press.

Fromkin, V. and R. Rodman (1993) *An Introduction to Language* (5th ed.) New York : HBJ.

Phillipson, R. (1992) *Linguistic Imperialism.* London : Oxford University Press.

Skutnabb-Kangas, T. and R. Phillipson eds (1995) *Linguistic Human Rights—Overcoming Linguistic Discrimination.* Berlin : Mouton de Gruyter.

江利川春雄 (1995)「英語帝国主義の図像学—教科書の挿絵の分析を通して—」『現代英語教育』1995年3月号：pp. 16～19。

大石俊一 (1990)『「英語」イデオロギーを問う—西欧精神との格闘』開文社出版。

太田雄三 (1995)『英語と日本人』講談社学術文庫。

小田 実 (1989)『小田実の英語50歩100歩』河合文化教育研究所。

大津由紀雄 (1995)「「英語帝国主義」はメタ言語能力によって粉砕できる」『現代英語教育』1995年3月号：pp. 20～23。

加藤淳平 (1996)『文化の戦略——明日の文化交流にむけて』中公新書。

小坂井敏晶 (1996)『異文化受容のパラドックス』朝日選書。

斎藤兆史 (1995)「英語帝国主義は怖い / 怖くない」現代英語教育』1995年3月号：pp. 8～11。

栖原 暁 (1996)『アジア人留学生の壁』NHK ブックス

津田幸男 (1990)『英語支配の構造—日本人と異文化コミュニケーション』第三書館。

_____編 (1993)『英語支配への異論・異文化コミュニケーションと言語問題』第三書館。

_____ (1996)『侵略する英語反撃する日本語・美しい文化をどう守るか』PHP。

堀部秀雄 (1995)「英語帝国主義批判をどう受けとめるか—ある歴史的パースペクティブから—」『現代英語教育』1995年12月号：pp. 26～29。

中島義道 (1993)「英語コンプレックスを探る」津田幸男編『英語支配の構造—日本人と異文化コミュニケーション』pp. 235～288、第三書館。

緑川日出子 (1996)「ひとりの英語教師が生まれるまで——英語教員養成課程の現場から」『英語教育事典——オーラル・コミュニケーションの成果を問う!』：pp. 55～58。

第15期中央教育審議会 (1996)『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第1次答申)』。

教育職員養成審議会 (1997)『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について (第1次答申』。

大学における教員養成の改善に関する調査研究会 (1996)『大学における教員養成の改善に関する調査研究 (第1次報告)』。